

Keynes and his Battles

(Gilles Dostaler 著)

渡部 晶

1. はじめに

著者の Gilles Dostaler (ジル・ドスタレル) は、ケベック大学モントリオール校に、1975年に社会学の教授として働きはじめ、4年後からは経済学の教授であった。1946年生まれで、2011年2月に癌で死去した。Gilles は、経済学、歴史学、哲学、心理学を勉強し、数学の教育も受け、ケインズ、ハイエク、フリードマン、マルクスに関する様々な面を取り扱い、フランスの経済思想の学会で活躍し、高い評価を得たという¹⁾。

本書(2007年)は、2005年刊行のフランス語原著の英訳であり、日本では2008年に藤原書店から邦訳²⁾が出ている。当時の日本の新聞・経済誌の書評で好意的に取り上げられている。死去に伴う学会誌の評伝では、著者の代表作として扱われている。フランス語原著は、文学的にも優れたものとして、カナダの権威ある文学賞の1つという2005年の Governor General's Literary Award を受賞している。

2. 本書の意義

2008年のリーマン・ショック以降、ケインズの再評価がさかんに行われ、我が国においても2011年春には、平井俊顕上智大学経済学部教授などによりケインズ学会が立ち上がった。そのような中で、本著の意義はなんであろうか。評者のバックグラウンドは、法学、特に憲法であり、1987年に旧大蔵省に事務官として採用されて以来、地方自治体出向なども含め行政実務を行ってきており、直近の1年間は、我が国の通貨制度(幣制)を担当していたというものである³⁾。

そのような立場から、経済学の状況を観察すると、自然科学のように、経済学に関しても、大学研究者⁴⁾の研究評価としては、コアな国際誌に掲載される論文数や、トムソン・ロイター社が提供するデータベースによる被引用数などが重視される傾向にあるようだ。そのため、知り合いの若い経済学研究者は、論文の作成に追われている。

佐和隆光氏が、評者が法学部生になったころの30年前に既に予想していたように、日本においても、「経済学の制度化」がかなり進んだ面が見逃せない。氏の予想に反して、新古典派総合は、DSGE(動学的一般均衡モデル)に変わったが、その「制度化」自体の状況は氏の想定し

1) Bradley W. Bateman & Catherine Martin (2011): Gilles Dostaler (1946-2011), *The European Journal of the History of Economic Thought*, 18:4, 615-616.

2) 鍋島直樹・小峯敦監訳(2008)「ケインズの闘い」, 藤原書店。Gilles は、日本語版への序文を寄せており、全体を俯瞰するための彼自身の手になる貴重な文章である。1P「日本はつねに経済思想の次元で—おそらく他の知的領域におけると同様—多元主義と寛容の地であった。」という指摘は最近の日本の粗野な議論が容赦なく飛び交う知的状況に鑑み示唆深い。

3) 拙稿(2012)「わが国の通貨制度(幣制)の運用状況について」『ファイナンス』第561号, 財務省。

4) 理科系の話ではあるが、杉原厚吉著(2012)「大学教授という仕事 増補新版」水曜社。

たとりに進化した⁵⁾。経済学の主流であり、長年にわたって洗練・確立されたミクロ経済学の枠組みに従って研究を進めた方が研究評価の対象となる論文を量産しやすいということもあると聞く。

しかし、現代憲法論が検討課題としているような「具体的な人間像」⁶⁾に比して、ミクロ経済学では、鋭く鮮やかな分析を可能とするために、貨幣の本質論を避けた上で、かなり大胆な割り切りで明快な人間像を前提にしているようにみえる⁷⁾。それをもとに人間社会の洞察を深めるのは大変意義深いことではあるが、現実の経済社会政策として直裁に適用するには、一定の留保が必要だと考える。評者からすると、その留保条件が上記の制度化の中で、ともすると忘れられ、経済論壇に登場する一部の「経済学」研究者には、ミクロ経済学の規準がその心にもまで浸透しているようにみえるのである⁸⁾。

5) 佐和隆光著 (1982)「経済学とは何だろうか」, 岩波書店。評者には、川島武宜著 (1964)「科学としての法律学」弘文堂、とともに、社会科学について考え読んだ思い出深い著作である。

6) 佐藤幸治著 (1983)「法における新しい人間像」『岩波講座 基本法学1-人』岩波書店。

佐藤氏はここで、ドゥオーキンを参照しつつ、「法ないし法的関心がますます『具体的人間』に、すなわち『苦しみや挫折感を持つ』『弱さ』人間に向けられてきていることは否定し難いように思われる。」とする。

7) 飯田泰之著 (2003)「経済学的思考の技術」ダイヤモンド社、N. グレゴリー・マンキュー著 (2008)「第2章 経済学者らしく考える」『マンキュー入門 経済学』東洋経済新報社。

8) ジェフェリー・フェファー、ロバート・I・サットン著 清水勝彦訳 (2009, 英語原著 2006)「事実に基づいた経営」, 東洋経済新報社。P66には、以下のような経営学者からの興味深い指摘がある。「ゲーリー・ベッカーやオリバー・ウィリアムソンをはじめ、多くの経済学者は人間というものとは自己の利益のために行動すると信じている。人間は自己中心的なものだという前提は、だから金銭的な動機付けが有効であるという理由になるだけでなく、なぜ恋に落ちるか、結婚するか(あるいは多夫多妻を望むかどうか)、子どもを持つかの説明にも使われる。しかし、経済学者は人間は生まれつ

本書には、そのような状況において、20世紀が生んだ卓越した知性であるケインズの生涯について、Gilles による経済学を超えた幅広い視野からの卓越した叙述でもって、一般の者の知的好奇心を満足させるとともに、経済学を修め研究していく人たちへのディシプリンをも自ずから示しているところに大きな意義を感じるのだ。

3. 本書の構成

本書は、10章と2編の interlude からなり、表題は以下のとおりである。1. で記した、Gilles の広範囲の学識を生かし、ケインズを様々な切り口から迫っているのがよくわかる構成だ。

第1章 Introduction, 第2章 Ethics: the sources of Keynes' vision, (First Interlude : Bloomsbury and the Apostles), 第3章 Knowledge: uncertainty, probabilities and the moral sciences, 第4章 Politics: beyond liberalism and socialism, (Second Interlude: The political history of Great Britain during the time of Keynes), 第5章 War and peace: from the Boer War to Versailles, 第6章 Money: economic motor and social pathology, 第7章 Labour: the battle against unemployment, 第8章 Gold: an international monetary system in the service of humanity, 第9章 Art: theoretician, consumer and patron of the arts, 第10章 Conclusion: from

きでなく、後天的に自己中心になったということをおぼえている。実際、経済学者は自己中心的なほうが得をするのだと教えている。コーネル大学のロバート・フランク教授を中心とした調査によれば、天文学専攻の学生に比べ、ミクロ経済学専攻の学生のほうが、はるかにうそをつく確率が高いという。価格と紹介料がいろいろな水道事業者の中から、学生が一社を紹介するというテストでは、『経済学者は他の専門家よりも悪の道に染まりやすい』という結果が出た。」

なお、皮肉にも、経営学にも「制度化」の波が押し寄せているようだ。入山章栄著 (2012)「世界の経営学者はいま何を考えているのか」英治出版。

Keynes to Keynesianism

また、Appendix として、Keynes and his time: chronology と Maynard as seen by his friends and contemporaries がある。

4. 内容の概観

(1) ケインズの哲学

本書は、第1章 Ethics から話が始まる。ケインズは、ムーア、ラッセル、ワイトゲンシュタインというケンブリッジに興った分析哲学の中にいた。初学者にとっては、このケインズが大きな影響を受けたこの哲学の内容を理解するのに難渋するに違いない。第1章、第2章は極めて密度が高く、躓きの章になりかねない。しかし、高い頂きだが、これを超えれば、かなり見通しが立てやすくなる⁹⁾。また、Gilles は、この章で、ケインズに先行するヴィクトリア朝期の経済学者などを簡単に概観して、著者自身のかかなり進歩的な立場も明らかにしている。

Ethics (倫理学と訳される) は、「社会的存在としての人間の間の共存の規範・原理を考究する学問」(広辞苑)である。本書の冒頭で、ケインズが若い時代にムーアの「Principia Ethica」の大きな影響を受けたことが記される。ここでムーアが主張したのは、「理想主義的功利主義」であり、「人間的な情愛、ならびに美の享受」を「目的それ自体」あるいは「最高善」とする議論(伊藤邦武氏による)で、これがヴィクトリア朝の伝統的な生き方にあきたりない若者たちに大きな影響を与えた。また、ケインズが、急進的な立場から、生涯中世的だと見なした慣習などに闘いを挑んだことが強調されており、それがこの本の題名にも通底しているわけである。ケインズに関連する同性愛を巡る記述も目を引く。

9) 導きとして、伊藤邦武著(2011, 初版は1999)「ケインズの哲学」岩波書店 がある。Gilles は、「一般理論」における後期ワイトゲンシュタインとケインズの関係、伊藤氏よりは控えめにみている。

しかし、ケインズは、Gilles が引用した以下の文章(私のような大蔵省に入省した者には面はゆいものだが)にあるように、文明の存続のために、伝統やしきたりの重要性を認めていた点にも留意すべきであろう。「In some ways I think Treasury control might be compared to conventional morality. There is a great deal of it rather tiresome and absurd once you begin to look into it, yet nevertheless it is an essential bulwark against overwhelming wickedness」(同書 p22)。ケインズの人間社会への深い洞察を感じる。

(2) ブルームズベリー・グループ

ケインズのことを語る際、ブルームズベリー・グループを避けて通ることはできない¹⁰⁾。First Interlude では、このグループの人物やその活動について概観している。イギリスの黄金期であるヴィクトリア朝の伝統的価値への様々な反逆が語られ、第一次世界大戦の影響も

10) 橋口稔著(1989)「ブルームズベリー・グループ」中公新書、が全体の雰囲気や鳥瞰できる好著。なお、クウェンティン・ベルの「ブルームズベリー・グループ」(1972)みすず書房 についての、歴史家の故萩原延壽氏の書評での以下の指摘に注目したい。「…ブルームズベリー・グループと呼ばれる知識人の集まり…では、…とりわけ会話の形式を重視する傾向がみられ、その背後には、このグループのメンバーをつよく支配していた懐疑主義と冷笑主義が踵を接しているようなひとつの精神態度—どちらの側にウェイトがかかるかについては、個人差がある—をよみとることができた。その態度の由来を追っていけば、かれらをとらえていた宗教的不可知論の問題に、おそらくゆきつくはずである。」(p72)。「…ブルームズベリー・グループのメンバーも、…生粋の自由主義者、それも民主主義の不可避性を承認しながら、同時に民主主義に内在する危険を感知していた自由主義者であった、という一事である。自由主義と民主主義との見境がつかず、その牽引と反撥の関係の認識がとくなくおざりにされがちな日本では、これは記憶しておいてよい事実である。」(p80) (2008)「斥候(ものみ)よ 夜はなお長きや」『萩原延壽集 5 書書周遊』朝日新聞社。

語られる。社会科学を研究する学者であっても、視野の広い研究を行うためには、文化的素養が重要であり、その学問にその時代の文化が影響を及ぼすことを、当たり前ではあるが改めて感じる。ケインズの学問においても、歴史的文脈は無視できない。また、ここで、Gilles が、心理学者フロイトの、グループやケインズへの影響を重視していることは興味深い。

(3) モラル・サイエンスとしての経済学

第3章は、広い意味でのケインズの科学的な方法論や認識論を取り扱っている。ここでは、ムーアやラッセルの影響下で出発した「確率論」や、その後のラムゼーによる決定的な批判やワイトゲンシュタインとの交流について触れられており、ケインズが、時代によってその立場を変化させてきたことがわかる。また、ティンバーゲンとの計量経済学の方法論に関する有名な論争が紹介されている。

ここでは、ケインズが、モラル・サイエンスに自然科学の方法を適用することができないことや、「時間」というものの取り扱い（不確実性）の重要性をのべたことに言及している。これは、最近でも、リーマン・ショック後とみにわが国でも議論され、人口に膾炙している論点だと思う。

(4) 政治

第4章は、ケインズと政治のかかわりについて記述する。Gilles は、政治もケインズの主な闘いの場の1つであると指摘している。ケインズは、政治にかかわるにあたって歴史というものを極めて重視していたことがわかる。

Gilles は、21歳のケインズが書いたエドモンド・パークについての論文を印象的に紹介する。この論文で、パークを政治的功利主義者として評価するとともに、不合理であっても旧慣の暴力的な破壊には慎重な態度を示した。その一方で、経済的な自由の強硬な主張については批判をした。

また、ケインズは自由主義者として、保守党の政策を非難し、自由党を支持しその政策形成

に貢献した。彼は、時代遅れとみなした自由放任主義を拒否し、政府が完全雇用や、所得や富のより平等な分配を保障することに躊躇すべきでないとしている。ケインズについて、パターンリズムや勤労者へのマイルドな軽蔑が結びついたエリート主義をとったと総括する。

Second Interlude では、ケインズ時代の大英帝国の政治史について、ケインズのイギリス政治とのかなり密接な関係に言及しながら概観している。労働党が新たな政党として勃興した時代背景が的確に記される。

(5) 戦争、雇用

5章、6章、7章、8章でケインズが生涯を通じて彼の心を占め、精力を消耗させた、戦争、雇用、金（通貨制度）の3つのテーマについて記述している。このうち、戦争、雇用について5～7章で記述されている。

第一次世界大戦を機にケインズは大蔵省で仕事をする事になり、パリで開催された講和会議では、イギリスを代表する使節の1人として大活躍したが、ドイツへの寛大な和平条件を条約案に入れさせることができず、「平和の経済的帰結」（1919年12月）という当時の世界に大きな影響を与えたパンフレットを執筆した。彼の経済学的見解は、戦争であれ経済恐慌であれ、解決方法が、特に社会の最も傷つきやすいところに、耐乏生活を課すことであってはならないというものであったとする。

また、ケインズがその研究対象であった貨幣を稼ぐことにも精通¹¹⁾していたことを活写し、貨幣が現在と将来を結ぶ連鎖であるとして、実業家が持つ貨幣愛を分析する。ケインズが主張した、貨幣数量説への批判、貨幣の心理的な要素、貨幣経済の特質について巧みに論じられて

11) ケインズが、当時の金融マーケットにもカリスマ投資家として絶大な影響力を及ぼしていた面については、那須正彦著（1995）「実務家ケインズ」中公新書が、官僚・投機家・実業家・大学管理者の顔を持つケインズを丹念に追っており、一読に値する好著だ。

いる。

さらに、近時最も重要と思われる労働についての記述は迫力がある。現在の主流経済学の非自発的失業への冷ややかな扱いについての Gilles の記述は一層の冴えをみせる。ピグーが、1913年の著作で失業の解決策は賃金を切り下げることであったことに対し、ケインズは「一般理論」でこれを攻撃した。ピグーは、その後自説では説明できない失業の存在を認めるといふ知的誠実さを示したという。ケインズの「一般理論」の簡にして要を得た解説がなされる。ここでケインズは、「diagnosis」（診断）と「cure」（治療）を区別している。ケインズの著作は診断にほとんどあてられていて、「一般理論」を経済政策の諸定理のひとつと見なすことは誤りであるとする。生き生きとした学問が「制度化」に墮し、また、政策になるときにおかしなものになることが、ややもすると生じることに對する戒めとして肝に銘じておくべき指摘であろう。

(6) 国際通貨体制

第8章で、金（通貨制度）についてのケインズが最も熱心に取り組んだ2つの闘いについて触れている。1つは、1920年代の金本位制への復帰への闘いであり、もう1つは、第二次世界大戦の間の、特に、新しい国際通貨制度の設立に係る彼の参加である。

最初の1920年代の英国の金本位制の復帰は、為替の安定性をもはや与えるものではなく、雇用や物価の安定を犠牲にして行われた。結局金本位制の停止で苦境を脱すしかなかったということになり、不幸にもケインズの主張のとおりになってしまったのである。

また、第二次世界大戦後の通貨制度については、イギリスを代表しケインズ案をもって、アメリカのホワイト案と議論を重ねることになった。ケインズは、現在もワシントンにあるIMF（国際通貨基金）とIBRD（国際復興開発銀行、現在の世界銀行）の主要な創設者の1人であるが、新しい国際通貨秩序を構築するという彼の当初のアウトラインからはかなり違った合意と

なった。ホワイト案は、好ましい成長に向け必要な流動性を世界に供給することによる拡張的なメカニズムを構築しようというケインズ案に比べ、為替相場の安定化を重視していた。そして、世界的な指導的地位はアメリカに第一次大戦後に移っており、ケインズは敗北したという。2012年10月に50年ぶりに日本でIMF・世銀総会が開催されたところであるが、百家争鳴が続く国際通貨制度改革についてその原点を振り返るのに適切なものとなっている。

(7) 芸術

第9章は、ケインズは、人間社会において、芸術家をもっとも高い位置に置いたことが指摘される。彼の芸術についての理論はそれほど卓越したものではないようだが、彼の経済理論の中に登場してくる人間は、合理的で利己的な経済人ではなく、バージニア・ウルフの小説における苦しんでいる登場人物やリットン・ストレイチーの物語に在るノイローゼの人物と同じ特性を持っていると指摘されているのが、ややもすると合理的経済人の仮定を当然視しがちな、経済論壇的な議論からすると示唆深いものだと思う。

また、彼は、第6章でみたように、貨幣を稼ぐのに長けていたが、それで得た貨幣を絵画などに投資したり、ニュートンの手稿などを収集したり、舞台芸術も愛好¹²⁾したりして、古代ローマのメセナスを想像させるような役割を果たしたことが、活写されている。

(8) 結論

第10章では、これまで多方面からアプローチしてきたケインズについて、Gillesによる結論が示される。

ケインズの経済理論が社会の全体的な理解の一部であり、そのように理解されることが彼の偉大なオリジナリティの源泉であるとされる。

12) 中矢俊博著(2008)「ケインズとケンブリッジ芸術劇場」同文館出版。経済学者としてのみ日本で有名なケインズの全く違った側面に光を当てる。

書 評

また、様々なケインズ主義の存在が指摘され、ケインズのレガシーが、しばしばぼやけ、時にはばらばらにされてしまうとする。そして、新自由主義は、ケインズ、ケインズ主義、ケインジアンの政策を1960年代末に始まる資本主義経済の経験した困難を理由に非難するが、Gilles は、戦後の成長と失敗の片方だけをケインズの責めに帰するのは不適切であると指摘する。

最後に、Gilles は、ケインズが残したものとして、社会の全体的な理解ということあげる。この著作で、それを再構築し、いまだに学ぶべき多くのことがあるとする。

5. おわりに

昨今の日本社会では、グローバル化・情報化

はますます進展する一方、戦後圧倒的だったアメリカの経済力の減衰、中国の軍事的台頭、新興諸国の経済的発展などがあり、我々をとりまく情勢も大きく変化し、国内も少子高齢化の影響が顕在化することなどから、様々な議論が錯綜する。

ケインズの総合的な知性の高みに到達することは到底凡人には望みえないものだと思うが、この巨人が鮮やかに示した闘いの軌跡をたどり、その目指した方向性の現代的意義を深く味わうのに最適の1冊だ。経済学者だけでなく経済の専門家でない一般の者にとっても一読に値すると考える。